普段着のわたしたち

ホームセンターが大好きです。ホームセンターへ行くとついつい無駄遣いをしてしまいます。しかしこの健康グッズは大正解でした。背中や腰に当ててグリグリとするだけですが、とても気持ちが良いです。

最近はヨガマットも手に入れ、ストレッチ等をしています。そのおかげなのか腰痛もなくなりました。健康第一でセルフメンテナンスを頑張りたいです。　征阿

私のお寺では、毎年「母の日」（今年は５月 14 日）」に境内のお稲荷さんの大祭で「きつね稚児行列」という行事があります。

他のお稚児さんと違い、きつねのお面と白いしっぽを着けます。女の子の後ろ姿の写真を当寺のＨＰで見て、多くの女性が

「もうかわいくてたまんないぃ～」と。きつねメイクの新郎新婦も加わり「きつねの嫁入り」もお練りいたします。その後、きつねの夫婦が見守る中、お子様の健やかなご成長を願い、御祈祷をいたします。90 分程の行事です。小さなお子さんもお気軽に参加ください。

参加ご希望の方は、ようこそ専養寺で検索☜ください。ＨＰからも申し込みができます。　俊徳丸

３月某日、三重県鳥羽は浦村のカキ小屋へ。

焼き牡蠣食べ放題と牡蠣ご飯付き。軍手を片手に１時間無言で食べ続け、30 ケはいただきました。

３歳（４歳以下無料）のチビ助も５ケ食べて大健闘。

しかし。。。白ワイン片手にゆっくりいただく方が良いような気がいたします。

訶梨帝母

京都伝統工芸大学の卒業・修了制作展へ行ってきました。佛像彫刻・木工・漆工芸・蒔絵・金属工芸・竹工芸・陶芸・和紙工芸、どれもこれも「大学生でここまでできるの！」と感嘆するできばえ。

残念なのは、卒業生のほとんどは就職先がなく、技術を活す場がないのです。

京都へお出かけの際は、京都伝統工芸館へお立ち寄りになることをお勧めします。地下鉄烏丸御池下車４番出口より徒歩２分。

迷走坊

『友引町内会通信』はスマートフォンやタブレットでもお読みいただけます。http://www.daigoji-temple.jp/　で検索して「友引町内会通信」をクリックしてください。字を自在に大きくして読むことができますので、便利かと思います。　寺務局

卒業、入学シーズン到来。宅の小坊主もこの四月より幼稚園年少クラスに編入いたします。昨年度一年間保育園に通い、団体行動にも慣れ同年の子供達と遊ぶ事の楽しさも知ったようで、幼稚園編入も安心しております。

保育園は制服が無かった為、毎朝アレを着るのコレを履くのと御託を並べるので、時に「男が着る物にガタガタ文句を言うんじゃないっ！」と大きな声を出す事もありましたが、幼稚園は制服で出掛けるので、朝の手間が一つ減ったと安堵。制服万歳。

「卒業」とは。

克服する事、クリアする事、次のステージに行く事、と私はこれまでの経験で認識しています。何かしらの苦難と思われる事象に遭遇した時、それを回避する方法もあるのですが、それをすると必ずまた同じ問題が降りかかってきます。卒業していないからです。人生山ほど課題はあるので、クリアしてもまた次々と悩みは尽きぬものですが、一つずつ卒業していくと、同じ問題には襲われない気がしています。

ではその苦難、頑張って戦い抜いてヘトヘトになるのかといえば、そんな事もありません。それだと心が病みます。私の方法はジッと静かに息を潜めて待ちます。水面にちょっとだけ目を出すカエルのように。決してその場を離れず後退もせず粛々と暮らします。体調が悪い獣が身体をまん丸にしてひたすら眠るかの如く。しかしアンテナの感度だけは保って。すると、やがて好転の兆しがやってきます。その時が卒業の時期です。

こもりうた㉗

困難期には、「転換期」を偽称する逃げ道があります。悪魔の甘い囁きです。それはきっと卒業へ向かう道ではありません。やたらと頑張るのもやめましょう。空回りするだけです。例えば、自分が小人になって、雨の降る草むらに放り出されたのをイメージしてみてください。巨大な虫に襲われないように、雨に打たれないように、草陰に身を潜めて小さく呼吸して様子をみましょう。立ち上がる時の準備は淡々と進めながら。

やがては雨も上がり、時機到来です。「卒業」はストンと憑き物が落ちて、その後は一切その事柄から解放されて悔いも残らず、誠にクリアな空を仰ぎ見る事ができます。

ちなみに、私の印象深い「卒業」は二件。どちらも七年間を要しました。細々した事柄は幾つか回避してきたこともあります。きっとそのうちまた遭遇するのだろうと覚悟しています。

ドンと来い！

今度は「卒業」してやろうじゃないの。

訶梨帝母

是非はその道によって賢し

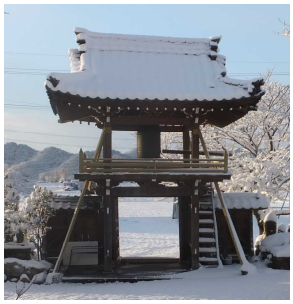
山門を建て替えることになりました。九十年間の風雪に耐えたものの白蟻の食害で崩壊の危険が迫ったのです。一階は通行用で、二階に梵鐘（ぼんしょう）を吊す鐘楼門（しょうろうもん）と呼ばれる形をしています。

資材はほぼ新しくなりますので、この機会に撞木（しゅもく）も新品に替えることにしました。

以前の撞木はシュロの木をワイヤーで吊っていました。美的云々（うんぬん）を度外視しても、撞いているうちにシュロの木がワイヤーの輪の中で滑って、鐘に当てるべき部分から徐々にずれてしまうのが問題でした。

鐘木作り五十年の専門メーカーを奈良市に訪ね、社長に話を伺うと、木製の撞木は経年劣化（痩せる、歪む）のため取り付け金具を定期的に締め直す必要がある。そこで、金属のフレームに木製の頭部を付けた製品を開発されたとか。頭部はすり減ったら取り替えられるのです。

当山の本堂は南向きに建っていて鐘楼門はその南に位置します。階段を北から南へ向かって昇り、東西に取り付けた撞木の紐を持って撞くわけです。問題は、階段途中の踏み板の上で踏ん張って撞かねばならないことなのです。



それを聞いた社長がミョ～な顔をして、「そんなことしたら、ご本尊にお尻向けて撞くことになりますがな」

ガ～ン！　大晦日に百八煩悩を洗い流せていなかったのか・・・。不作法を避けるには階段上で百八十度向きを変えねばなりません。暗くて狭い場所で。

鐘楼門の撞木は通行する人の流れと平行に取り付けるのが基本だそうです。

外から内へ向けるのを「撞き込み」、内から外へ向けるのを「撞き出し」と言い、全国の鐘楼門の七割は撞き込みで、三割は撞き出しだとか。

「できたら階段を昇るのではなくて、門を一歩入ったところで紐を引っ張って鐘を鳴らしたい。そしたら、女性や子どもでも危なげなく撞けるのですが」と言うと、「できます。ワイヤーと滑車使った装置も売ってます」とあっさり言われました。

一階から鐘を撞こうとすると、天井で遮られて鐘が見えないので、天井の一部を格子にする方法があるとも教わりました。

寛延四年（一七五一）鋳造の鐘は大東亜戦争中に制定された金属類回収令に従って昭和十七年に供出。返ってきませんでした。

昭和二十三年再鋳造の梵鐘の銘文には、お国に命を捧げた幾多の英霊への鎮魂と、平和に資するためにと刻まれています。

物資が何もかも不足していた時代に、大事な蓄えの中から新しい梵鐘鋳造のためにご寄進をいただきました。今とは比較にならない勇気が要ったことでしょう。その方々の前で最初の一打が鳴り響いた時、どのような感慨をもって聞かれたか。おろそかに扱える鐘では無いのです。　迷走坊

時々思い出すこと

うちの長男が、京都総本山光明寺での２年間の修行を終え無事３月１日下山いたしました。それもつかの間、今、中国を旅行しています。「初めての海外旅行がなぜ中国？」と思うのですが、幼少から少林寺拳法をしているので特別な思いがあるのかも知れません。実は私の初めての海外旅行も中国でした。彼と同じ 20 歳(1980年)の12月でした。

1977 年に終結した「文化大革命」から３年が経過した年です。今と違って中国への渡航は自由ではなく、私は「佛教友好団」の一員として旅行しました。つまり「お客様」です。毎食豪華な食事で、外国との交易が少なかったせいか、デザートなどに輸入した果物などの食材が一切登場しないという、ある面では純粋な中国を体験したのかも知れません。反面、現地通訳男女一名ずつが付き、彼らが同行していないと自由に街中を歩けないとか、向こうが用意した小学校訪問等の公式行事に出席しなければならないなど、わずらわしさもありました。寺院に参拝しましたが、御堂内の石畳には一面豆が干してある状態でした。「文化大革命」の爪痕が残っていました。

北京に降り立って最初に驚いたのが、全員が「人民服」を着ている光景です。そして北京中心部でさえも乗用車はめったに見ることなく、おびただしい数の自転車に乗る人です。当時、中国で自転車を買うことは、日本でカローラを買うこと同様のことと通訳の人が説明していました。食事、ホテル、買い物、列車移動など、外国人旅行者と現地民が交わらないような配慮が徹底的になされていました。マイクロバスの車窓から見る現地の人は、どこか目力が無いようであるような、「今自らが何を考えているのか悟られまい」、とう沈黙の表情でした。勿論、街中大声で話している人もなく、現在、京都など日本の観光地で闊歩している中国人旅行者の振る舞いを思うと、同じ民なのか不思議に思う時があります。「文化大革命」の 10 年間がどれ程辛いものだったのでしょう。

高倉健似の男性の通訳が私に語りかけてきました。「３日前に、北京中心部にある公園の凍った池で、近くの小学校の女性教師がスケートの授業をしていました。すると氷が割れ女の子が池に落ちました。するとたちまちに人だかりとなり、女性教師と大勢の人々の間で救助に対する値段交渉が始まり大騒ぎになりました。その間に女の子は残念な結果になりました。中国とはそういう国であることを将来忘れないでください。」当時、外国人である私にこんなニュースを語るのはご法度です。彼はエリートだと思います。あえて若い私だったからこそ語ってくれたのだと思います。この鉛のような言葉は、一生体から離れることはないでしょう。

現在、日本は中国と緊張関係にあります。彼が語ってくれたことをよく思い出します。旧正月には家族連れの中国人旅行者が多く来日しました。この旅行が良い思い出になり、子供たちが将来日本を好意的に思ってくれるようになることを願うばかりです。　俊徳丸

『私説法然伝』（２７）

極楽への道②

先月号では法然上人が経蔵に籠もられて、自らを「三学の器に非ず」と内省されていくことについて書きました。今月はその続きになります。

【別の方法論を求められた法然上人だが、一体どのようにその模索をされたのだろうか？

『法然上人行状絵図』にはある日、法然上人が師の叡空と論争を行った記述がある。称名念佛と観想念佛の優劣についてである。叡空は自らの師の良忍の説をもって観想念佛が優れていると言い、法然上人は称名念佛こそが優れていると言った。法然上人が「良忍上人は我々より先にお生まれになった方ですので」と言ったところ叡空はたいそう立腹したとある。

叡空との論争から読み取れる事は多い。まず叡空は念佛の人であった。叡空の師の良忍は元は比叡山東塔の常行三昧堂で不断念佛行を修行する堂僧で、後に一人の念佛が万人の念佛に融通し合うという融通念佛の教えを開眼し現在の融通念佛宗の開祖となられた方である。

叡空自身もまた師より相承した「念佛」の教えを守っていた。しかし法然上人はその「教え」に対して反発したのである。ではその「教え」とは何であろうか？

それを知るにはまず「念佛」という言葉がキーワードとなるのである。】

以前にも法然上人は師である叡空と論争を行ったことを書きましたが、ここでもまた論争を行っています。そしていつも師の叡空は法然上人に対して腹を立てていますが、それは何故でしょうか？

まず念佛の優劣についてがありますが、詳しい事は次号以降に書いていきたいと思います。ここで重要なポイントとなるのは叡空は師の良忍の「教え」を元にして法然上人と論争を行っているところです。

それに対して法然上人は自らが考えた結論を元に論争を行っています。そして叡空に対して「良忍上人は先にお生まれになった方」と言いました。これは法然上人の姿勢を現している言葉となります。つまりは師の「教え」をただ守り伝えることを自分はしない、学んだ結果を元に新たな「教え」にたどり着きたいという事を言いたかったのではないでしょうか？「新たな方法論」にたどり着くには師の「教え」では不可能であるという事を示しているのです。叡空だけでなく師の良忍までを否定するかのような法然上人に対して叡空は怒ったのです。

以下次号に続く（征阿）

観経物語（１０４）

正宗分（しょうじゅうぶん）その58
散善（さんぜん）その１

《本文その１》

佛、阿難および韋提希に告げられる。「上品上生とは、若し衆生有りて、彼の国に生まれんと願う者は、三種の心を発せば即便往生す。何等三と為すや。一には至誠心、二には深心、三には回向発願心なり。三心を具うる者は、必ず彼の国に生まれん。

《意味・訳文》

佛（おシャカさま）は阿難（＝佛弟子・出家者）と、韋提希（＝国王の夫人・在家者）に（自ら）告げられた。

「（九の段階に分別したその中で）上品の中でも上の（極楽浄土に生まれる）往生の仕方とはどのようなものか。

若し衆生のうちで、彼の浄土に生まれたいと願う者があれば、三種の心を起こすと、時をおかないで迅速に（＝即便）往生することができる。三種の心とは何か。第一には真実の心（＝至誠心）であり、第二には深く信ずる心（＝深心）であり、第三には善根善行を積んで、その功徳を浄土へ往生することに振り向けたいという願いを起こす心（＝回向発願心）である。この三種の心（＝三心）を備えている者は、必ず彼の浄土に生まれることができるのである。

《私訳》

観想とか観法という私たち衆生（＝凡夫）にとって困難な善行（＝難行）を説き終わられた釈尊は、突然に自ら衆生の往生の仕方に上品上生・上品中生・上品下生そして上品上生・中品中生・中品下生さらに下品上生・下品中生・下品下生と、九品があることを明かされました。これらの往生の仕方をする衆生はここまでに説いてこられた観想・観法ができる、心を統一して集中する修行が出来る衆生（＝人間）とは同一の者なのか、さらには別の者なのか、何の説明もないままに話しだされました。

また、どちらにせよ九種類に能力や修行などの善根の積み方に、段階や差をつけて分類された衆生が存在するように説かれているかのように見えながら、上品上生の衆生のみが「彼の浄土に生まれたいと願う者があれば」と願う心の持ち主を上品上生に限定しているかのように見受けられるが、中品や下品にはないのだろうか。また「三心」が唐突に言われて、しかも何の説明もされないのかという疑問だらけの部分です。

《妙星斎》

「諸宗仏像図彙」鹿鳴文庫